

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Variations and Changes in the Usage of Honorifics due to Occupations: Analyses from the Okazaki Survey on Honorifics

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳村, 裕, YANAGIMURA, Yu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000861">https://doi.org/10.15084/00000861</a>

## 話者の職業による敬語使用の差異と変化

——岡崎敬語調査資料の分析——

柳村 裕

東京外国語大学 特別研究員／国立国語研究所 時空間変異研究系 非常勤研究員 [-2016.03]

### 要旨

本研究では、岡崎敬語調査資料の分析に基づき、「敬語の使用」と「話者の職業」がどのような関係にあるかを探る。敬語使用の特徴に関わる指標として発話の「丁寧さ」と「長さ」を集計し、話者の職業は「事務系」「接客系」「労務系」の三つを区別した。これらの敬語使用の特徴が話者の職業によってどう異なるかを調べた。また、岡崎敬語調査資料の複数の調査時点での多様な生年・年齢の話者を比較することにより、職業による敬語使用特徴の差異のパターンがどのように変化してきたか、また、個人内でどのように変化するかを調べた。

結果の概要は以下の通り。まず、事務系、接客系、労務系のうち、労務系が最も短くぞんざいに話す。事務系と接客系では、発話の長さは同程度であり、丁寧さは事務系のほうがわずかに高い。また、経年変化パターンに関して、接客系の話者は年齢が高くなるほど長く丁寧に話すようになる。つまり、言語形成期以降の加齢に伴う言語変化である「成人後採用」のパターンが観察される。事務系と労務系では、成人後採用は観察されないか、あるいは観察されたとしてもその変化幅が接客系のものより小さい。

以上の分析結果に基づき以下のような解釈を行った。まず、敬語使用特徴の職業差は、職務の中での敬語使用の違いによるものとして説明できる。つまり、職務の中での敬語使用は、職務以外の私的な場面での敬語使用に影響を与えると解釈できる。また、職務の中での敬語使用の違いは、敬語の習得・変化のパターンにも影響すると解釈できる。以上より、職業という話者属性は、敬語の使用・習得・変化と、それらの社会的変異を理解する上で重要な話者属性の一つであるといえる\*。

キーワード：敬語、職業、丁寧さ、文の長さ、成人後採用

### 1. 導入

本稿では、岡崎敬語調査の発話資料と発話者の社会属性項目資料を分析し、話者の「職業」による敬語使用の差異およびその経年変化パターンの差異を明らかにする。またその結果に基づき、話者の職業という社会属性変数が、私的な場面での敬語使用に対してどのような影響を与えるか、両者がいかなる関係にあるかという問題について議論する。

#### 1.1 岡崎敬語調査

岡崎敬語調査は、国立国語研究所が愛知県岡崎市において実施してきた、敬語の使用と敬語意識に関する大規模経年調査である。半世紀以上の期間にわたって3回の調査が行われ、第1次調査は1953年、第2次調査は1972年、そして第3次調査は2008年に実施された。各調査は、敬

\* 本稿は、2016年2月15日に国立国語研究所で開催された「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」研究発表会での口頭発表の内容を加筆・修正したものである。発表時に有益なコメントを下された方々に感謝申し上げる。本研究は、国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」（プロジェクトリーダー：井上史雄、2012～2015年度）の研究成果である。

語行動を尋ねる項目や、敬語に関する意識を尋ねる項目、被調査者の社会的属性を尋ねる項目など数多くの項目群で構成され、様々な種類のデータが収集された。

それらのうち、本稿では、特定の設定場面における被調査者の発話回答資料と、発話者の社会属性項目の一つである職業を主要な分析対象とする。発話回答資料は、被調査者に質問文や刺激図を提示して特定の場面を想定させ、その場面での敬語行動を尋ねたものである。このようにして回答された発話情報は「反応文」と呼ばれる。一方、社会属性項目とは、各反応文に対応する発話者の情報、例えば話者の生年、性別、学歴、職業などである。

岡崎敬語調査での敬語行動を尋ねる設定場面項目は、第1次～3次の調査の間でいくつかの変更があり、各調査次で13～18の場面（質問項目）が設定されている。それらのうち、本稿で分析対象とするのは11場面である。この11場面が選ばれたのは、これらが、調査次ごとに若干の変更はあるものの、すべての調査次において共通の質問項目であるとみなすことができ、互いに比較可能であると判断したためである<sup>1</sup>。

本稿で扱う11場面の概要を表1に示す。この表の右端列に例を示した反応文が本稿の分析対象である。

表1 岡崎敬語調査 11 場面の概要

番号	場面名	質問の概要	相手	反応文（回答）の例
101	道教え	道を聞かれて教える	旅の人・男性 20-30代	ここをまっすぐ行かれてすぐそこです
102	電報振込	電報・振込用紙をくれるよう頼む	局員・男性 20-30代	電報用紙を一枚ください
103	荷物預け	荷物を預かってくれるよう頼む	店員・男性 20-30代	すみませんがしばらくこれをお預かり願います
104	傘忘れ	傘を忘れたことを指摘する	見知らぬ人 男性・30代	ちょっと傘をお忘れになりましたよ
105	先生	昔の先生の質問に答える	恩師・男性 50代	これはわたしの孫です
106	電燈新聞	集金の間違いを確認するよう頼む	集金人・男性 20-30代	すみませんがもう一度調べてもらえませんか
107	議事堂	道を尋ねる	見知らぬ人 男性・20-30代	ちょっとお尋ね致しますが議事堂へ行きたいんですけどどちらへ行ったらよろしいですか
108	医者	医者に往診を頼む	医者・男性 50代	近所の人が急病で困りますからすぐ来ていただけますか
109	席譲られ	席を譲られて断る	学生・男性 10代	もうすぐ降りますから結構です
110	おつり	おつりの間違いを確認するよう頼む	店員・女性 30代	ちょっとお金が足らんようだけれどもみてもらえんか
111	傘貸し	傘を貸す	知人・男性 20-30代	この傘お貸ししますからどうぞさしてってください

<sup>1</sup> 過去の調査報告では、本稿で扱う11場面に「物売り／魚釣り」場面を加えた12場面が中心的な場面として扱われてきたが、本稿ではこの「物売り／魚釣り」場面は分析対象から除外した。これは、この場面が第1次調査（物売り）と第2次・第3次調査（魚釣り）で同一とみなすのが難しく、比較不可能であると判断したためである。この場面は、他の11場面と比べると「短い発話で、子どもに声をかける」という点が主眼であり、この点においては同一場面であるとみなし得る。つまり過去の調査報告での分析のように他の11

## 1.2 先行研究：言語使用・敬語使用と職業の関係

岡崎敬語調査では、第1次調査の開始当初から敬語使用に関わる社会的要因として性別や年齢とともに職業も重要であると考えられ、実際に被調査者の職業を尋ねるいくつかの質問項目を設けてきた。しかしこれまでの調査報告では、話者の職業による敬語行動の違いなどに関する分析は、重点的に扱われてきたとは言い難い。これは以下の理由による。

まず問題となったのは職業を分類する基準である。敬語使用との関連を探る上で職業のどのような側面が重要となるか、それに伴い、職業をどのような基準で分類するのがよいか（例えば所属産業か、職務内容か、収入か、社会的地位・評価・イメージか）を決められなかった。このため第1次調査報告書（国立国語研究所1957）では、所属産業や雇用形態など複数の基準により分類した職業ごとに発話の丁寧さの比較集計結果を提示したのみであり、その上で、詳細な分析過程は示されていないものの、職業による敬語使用の差は無いと結論付けている。また、第2次調査の報告（国立国語研究所1983）では、質問項目などの調査設計自体は第1次調査をほぼ踏襲したものの、第1次調査で有益な結果が得られなかったことを受けて、職業関連項目の本格的な分析は行われず、集計・分析結果も示されていない。第3次調査（国立国語研究所2010）でもほぼ同様の状況であり、その結果、岡崎敬語調査での職業関連項目は初期的な集計結果すら報告されておらず、ほぼ未分析のままであるといえる。

一方で、岡崎敬語調査とは別に国立国語研究所が実施した「企業の中の敬語」に関する調査（国立国語研究所1982）では、話者の職務内容、すなわち実際に従事する職務・作業によって、敬語使用とその意識に差があることを示唆する結果が得られた。具体的には、一つの企業の中でも、本社あるいは工場で管理・事務的作業に従事する「事務系」と、工場での生産工程作業に従事する「現場系」の間で、言語意識・敬語意識に差が見られた。例えば、ことばづかいへの留意度について、「自分のことばづかいに気を配るほうか、無頓着なほうか」という質問に対して「気を配るほうだ」と回答する話者の割合は、現場系よりも事務系のほうが高かった。また、「現在社内で使われている敬語は、仕事を進める上で不可欠か、仕事のためにはかえって邪魔になるか」という社内敬語への意識を問う質問では、「現在の敬語は不可欠だ」と回答する話者の割合は、現場系よりも事務系のほうが高かった。

ただしこの研究は、地域社会（すなわち職務以外の場面）で使われる敬語との対比において、企業内での敬語行動・意識を調査するためのものであった。このため、上述のような敬語行動・意識に関する調査項目は、職場での、職務の中での敬語について尋ねたものであり、職務以外の私的な場面での敬語使用についても同様の職業差があるかどうかは分かっていない<sup>2</sup>。また、上述のように職務内容の異なる話者を対象に含むものの、一つの企業を対象としており、多種の職業

場面との比較においては同一場面として扱える。しかし本稿では、調査次による文の長さの違いを主要な考察対象の一つとするため、この点では「物売り／魚釣り」場面は同一とはみなしにくい。

<sup>2</sup> 本稿では「私的な」という表現を、ここでの用法のように、「職務以外の、職務中ではない」という意味で用いる。「私的な場面」といった場合、これはある話者の（たとえ公的であっても）職務中以外のすべての場面を指す。

を網羅的に検討したものではなかった。したがって、敬語使用と職業の間にはいかなる関係があるか、特に、職務以外の私的な場面でのより日常的といえる敬語使用が、話者の職業によってどのように異なるかは、依然として明らかになっていないといえる。

一方で、「企業の中の敬語」の上述の調査結果は、岡崎敬語調査資料の再分析が有望である可能性を示唆する。すなわち、岡崎敬語調査の第1次調査報告書では敬語使用に関して職業による差は無いとされたが、職務内容を基準として職業を再分類すれば、職業差が観察できる可能性がある。言い換えると、第1次調査報告では、敬語使用と関わる職業の重要な側面を取り上げなかったために、敬語使用の職業差を見落としていた可能性がある。

### 1.3 本研究の課題と結果の概観

以上の背景を踏まえて本稿で取り組む研究課題をここで明確にし、その結果を概観しておこう。本研究では、岡崎敬語調査資料の反応文および職業項目を分析し、話者の職業によって敬語使用に差が見られるかを検討する。岡崎敬語調査の調査場面は、表1に示した通り、(被調査者にとっては)職務以外の私的な場面のみで構成される。このため、敬語使用に対する話者の職業の影響が、職務の中だけでなく、私的場面にも及ぶかどうかを明らかにすることができる。

職業の分類は、「企業の中の敬語」の調査結果から着想を得て、その職務内容に基づいて行う。具体的には、職業を「事務系」「接客系」「労務系」の三つのグループに分類する(この分類の詳細は2.4で述べる)。第1次調査についてはその報告書(国立国語研究所1957)にすでに集計があるが、今回この三つのグループに再分類する。第2次と第3次については今回初めて集計を行う。こうして得られた三つの職業グループを比較し、反応文における敬語使用の特徴に差があるかを調べる。敬語使用の特徴に関わる指標として、反応文の「丁寧さ」と「長さ」を集計する(この指標の詳細は2.2で述べる)。その結果、これらの指標が話者の職業によって異なること、具体的には、事務系と接客系の反応文がより長く丁寧であり、労務系ではより短くぞんざいであることを示す。

また、岡崎敬語調査資料の特性を活用し、職業ごとの敬語使用特徴の経年変化パターンの分析を行う。岡崎敬語調査資料は複数の調査時点における多様な年齢の話者を調査対象に含む。このため、見かけ時間(apparent time)および実時間(real time)での分析により言語現象の経年変化パターンを明らかにすることができる(詳細は2.3で述べる)。本研究では、個人内での、個人の生涯を通しての敬語使用の変化について、そのパターンに職業差があるかどうかを調べる。特に、敬語の成人後採用、すなわち加齢に伴う敬語使用の変化の有無を職業ごとに観察する。その結果、典型的な成人後採用のパターンが明瞭に観察されるのは、三つの職業グループのうち接客系のみであることを示す。

## 2. 方法

本研究で扱う資料の詳細と、その集計・分析方法を述べる。

## 2.1 資料

岡崎敬語調査の被験者サンプルは、ランダムサンプルとパネルサンプルに分かれる。前者は、調査次ごとに新たに無作為抽出によって選ばれた岡崎市民のサンプルである。後者は、第2次・第3次調査において、過去の調査（第1次と第2次のいずれかまたは両方）に参加した経験のある継続回答者のサンプルである。このうち、本研究で分析対象とするのはランダムサンプルである。パネルサンプルは、同一個人の職業が調査次によって異なる場合があり、職業項目の分析における扱いが難しいため対象から除外する。

ランダムサンプルのうち第1次調査のものは、さらに「本グループ」と「比較グループ」に分かれる。これは被調査者への面接調査を実施した調査員の違いによるグループ分けであり、前者の調査員は研究者、後者の調査員は学生である。本グループをP（properあるいはprofessionalの略）、比較グループをC（controlあるいはcollegeの略）と呼ぶ。これまでの岡崎敬語調査の報告では、こうした調査員の違いによって回答が異なる可能性を考慮して、本グループを主要な分析対象としてきた。本研究でもこれに従うが、比較グループの集計結果も参考のために提示する。

本研究での分析対象話者は、以上のランダムサンプルからさらに限定する。職業について、後述する方法で分類可能な回答が得られた話者のみを分析対象とする（対象人数は2.4で示す）。職業についての回答が、無回答、複数回答、分類不能の職業であった話者は対象から除外する。また、無職の話者については、集計結果は提示するが主要な分析対象からは除外する。無職というのは、学生、主婦、退職者など多様な属性の話者が含まれるグループである。このため職業についてある程度均質な他のグループと同列には扱えない。したがって他との比較において無職というグループの特徴を同定するということはせず、集計結果を提示するにとどめる。

## 2.2 分析対象変数：発話の「丁寧さ」と「長さ」

本研究では職業による敬語使用の差異を見る。この敬語使用の差異を表す指標として、発話の「丁寧さ」と「長さ」を分析する。以下、この二つの変数について順に述べる。

発話の丁寧さは、これを3段階の数値で数量化した「丁寧さの段階付け」を使用する。これは、岡崎敬語調査で用いられてきた丁寧さの尺度であり、各反応文の丁寧さを「1, 2, 3」の3段階で判定したものである。「1」が最も丁寧で、「3」が最もぞんざいである。順にほぼ「デゴザイマス体、デスマス体、ダ体」に相当する。「特別（御）丁寧体、丁寧体、普通体」「最高敬体、敬体、常体」などとも呼ばれる。3段階の判定基準を表2に示す。ただし、本稿の分析では、いずれの調査次についても、松田謙次郎氏の判定による段階付けを使用した<sup>3</sup>（Matsuda 2012）。

<sup>3</sup> 岡崎敬語調査の第1次と第2次の報告書では、丁寧さの段階付けは野元菊雄氏の判定による（国立国語研究所 1957, 1983）。本稿で用いる段階付けはこれらの調査報告書の値ではなく、松田謙次郎氏が第1次・第2次調査の反応文を再判定し、第3次調査の判定を新たに加えたものである。

表2 3段階方式の丁寧さ段階付けの基準：国立国語研究所（1983:62）より

段階1	(…) デゴザイマス, (…シテ) イタダキマス, (…シテ) クダサイマセ, イラシテクダサイ, イラッシャイマセ, のように, 大体二つの高い敬語形式の結合から成るもの。およびそれより丁寧な形。
段階2	…デス, …マス, (…シテ) クダサイ, イラッシャイ, のように, 「です・ます調」や一つの高い敬語形式から成るもの。
段階3	…ダ, …ヨ, …シテ (依頼), …シロ, 言い捨て (例えば「電報用紙!」), のように, 高い敬語形式がないとみられるもの。およびそれよりさらに乱暴な形。 …シテクレ, …シテモラオウ, のように, 簡単な頼む言い方や, オクレ, オイデ, … (シ) ナサイ, のように目下などにしか使わない言語形式。

以下に丁寧さ各段階の反応文の例を示す。いずれも101道教え場面の例である。

- (1) 丁寧さ1 「まっすぐ北へ行って頂くと橋がございます」
- (2) 丁寧さ2 「あの橋が明代橋です」
- (3) 丁寧さ3 「あの橋が明代橋だ」

次に発話の長さについて述べる。これは反応文のモーラ数をカウントしたものである。発話の長さは、敬語使用、特に発話の丁寧さと密接に関係する。表2から分かる通り、敬意の高い表現を用いると基本的に発話は長くなる。このことは(1)～(3)からも分かる。また、文の長さと敬意の高さが正の相関を示すことも知られている(井出他1986)。このため本研究では、敬語使用の特徴、すなわち敬語形式の有無や数を示す指標として、丁寧さの段階付けに加えて反応文の長さ(モーラ数)を集計し、職業ごとに比較する。

### 2.3 集計・分析方法

特定時期における職業による敬語使用の差異に加えて、その差異の経年変化、あるいは、職業ごとの経年変化パターンも分析するために「見かけ時間」の分析および「実時間」の分析を行う。見かけ時間については、まず第1次～3次調査のそれぞれで、反応文の丁寧さと長さが話者の年齢によってどう異なるかを見る。各調査のサンプルには調査時点での年齢が10代～70代の話者が含まれている。その年齢差を見ることで、敬語使用の特徴が加齢とともにどう変わる(あるいは変わらない)かを、見かけ時間上の変化として観察する。

一方で特定の年代生まれの話者について3回の調査結果を比較する実時間の分析も行う。例えば1930年代生まれの話者は、第1次調査には10代、第2次には30代、第3次には70代の話者として参加している。こうした同一年代生まれの話者を調査次間で比較することで、敬語使用の特徴の変化を、実時間上の変化としてより直接的に観察する。

以上の分析では、反応文の丁寧さと長さのいずれについても、職業および年齢の各水準における平均値を代表値として用いる。ただし丁寧さについてはこの方法には問題がある。つまり、丁寧さの段階付けは本来順序尺度であり、厳密には間隔尺度として扱うことができない。具体的には「段階1」と「段階2」の丁寧さの差は、「段階2」と「段階3」の差と等間隔とは限らない。しかしこうした問題点を認識した上で、丁寧さの段階付けの平均値は、その大きな変化傾向や話

者属性による差異を検討する上では有効である。実際、過去の岡崎敬語調査の報告でもこうした手法が用いられている（例えば Matsuda 2012, 柳村 2014）。そこで、本研究でも、その扱いには慎重を期す必要があるが、話者の職業・年齢の各水準の代表値として丁寧さの平均値を用いることにする。

## 2.4 職業の分類と集計

一般にいう「職業」とは「所属産業」と「職務内容」の両者を指す。所属産業とは、一般に業種などとも呼ばれるもので、「金融業、製造業、農業、漁業」などの産業分類を指す。一方職務内容とは、「管理職、専門技術職、販売、サービス、労務」など、各個人が実際に行う具体的な仕事を指す。例えば銀行に勤める人を例にとると、所属産業は「金融業」となるが、その中で「管理的・事務的」な仕事に従事する人と、窓口で「接客・販売」に従事する人と、守衛とでは、職務内容が異なる。これらのうち本研究では職務内容に関する集計・分析を報告する。これは上述の通り、「企業の中の敬語」において職務内容に基づく分類によって有望な結果が得られているためである（国立国語研究所 1982）。

岡崎敬語調査の職業に関する調査項目は、調査次ごとに質問の仕方が異なるため比較が難しい。このため第3次調査の調査報告書では、総務省統計局の日本標準職業分類（1997年改定版）に基づき、3回の調査結果を統一の基準で再分類・集計している（国立国語研究所 2010, 第2分冊）。本研究では、この第3次調査報告での職業分類を基礎として、新たな分類と集計を行った。これを表3に示す。この表の左端の列に示したように五つのグループを区別した。まず有職と無職に分け、有職は事務系、接客系、労務系の3グループに分けた。「その他」のグループは、上述の分析対象から除外したグループであり、分類不能の職業、複数回答、無回答の話者が含まれる。

表3 職業の分類と調査次ごとの集計

	1次				2次		3次		合計	
	P		C							
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
事務系	40	16.3%	16	8.7%	93	23.3%	83	27.1%	232	20.4%
接客系	30	12.2%	24	13.0%	47	11.8%	47	15.4%	148	13.0%
労務系	50	20.4%	48	26.1%	56	14.0%	50	16.3%	204	18.0%
無職	90	36.7%	64	34.8%	119	29.8%	104	34.0%	377	33.2%
その他	35	14.3%	32	17.4%	85	21.3%	22	7.2%	174	15.3%
合計	245	99.9%	184	100%	400	100.2%	306	100%	1135	99.9%

※割合については四捨五入して表示しているため、合計は必ずしも100%にならない。

次に岡崎敬語調査の過去の報告との対照のために、表3の本稿での職業分類と、第3次調査報告書（国立国語研究所 2010, 第2分冊）での分類の関係を表4に示す。左端の「大分類」が表3と同じ本稿での分類であり、2列目の「小分類」が第3次調査報告書での分類である。後掲図1参照。

表4 岡崎敬語調査第3次調査報告書(国立国語研究所 2010, 第2分冊)での職業の分類

大分類	小分類	1次				2次		3次		合計	
		P		C							
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
事務系	専門的・技術的職業	11	4.5%	7	3.8%	23	5.8%	39	12.7%	80	7.0%
	管理的職業	6	2.4%	1	0.5%	19	4.8%	5	1.6%	31	2.7%
	事務	23	9.4%	8	4.3%	51	12.8%	39	12.7%	121	10.7%
接客系	販売	24	9.8%	20	10.9%	33	8.3%	26	8.5%	103	9.1%
	サービス職業	6	2.4%	4	2.2%	14	3.5%	21	6.9%	45	4.0%
労務系	保安職業	1	0.4%	1	0.5%	0	0.0%	3	1.0%	5	0.4%
	農林漁業	7	2.9%	9	4.9%	0	0.0%	3	1.0%	19	1.7%
	運輸・通信	0	0.0%	0	0.0%	6	1.5%	4	1.3%	10	0.9%
	生産工程・労務	42	17.1%	38	20.7%	50	12.5%	40	13.1%	170	15.0%
	無職	90	36.7%	64	34.8%	119	29.8%	104	34.0%	377	33.2%
	その他	35	14.3%	32	17.4%	85	21.3%	22	7.2%	174	15.3%
	合計	245	99.9%	184	100%	400	100.3%	306	100%	1135	100%

※割合については四捨五入して表示しているため、合計は必ずしも100%にならない。

この表から分かるように、本稿での「事務系、接客系、労務系」の3分類は、第3次調査報告書での複数の職業区分を統合したものである。これは、第一に、各職業区分の話者数を信頼できる数に増やすためである。また、職務の中のことば・敬語の使用に関して類似の傾向を示すと考えられる職業をまとめるためでもあり、表4の大分類はこれを意図している。

まず言語使用の量についていうと、労務系は肉体労働を主な職務とし、職務の中のことばによるコミュニケーション、特に敬語の使用は比較的少ないと考えられる。これに対し事務系と接客系は、職務の中のことばの使用、対人コミュニケーションが比較的多いと考えられる。このうち、事務系はデスクワーク、接客系は顧客との会話が職務の中心となると考えられる職業を含む。したがって職務の中の敬語の使用は、労務系で最も少なく、接客系で最も多いと考えられる。

一方で職務の中での言語使用の内容、あるいは会話の相手についてこの3者を比較すると、事務系と労務系は職場内での同僚との会話がが多く、接客系は顧客との会話が頻多いとされる。同僚との会話では相手との関係(上司か部下か等)によってどのような文体を用いるかが異なるが、顧客との会話は敬語使用が多くなると考えられる。

この3者を比較することで、職務の中の敬語使用の量や内容が、職務以外の私的な場面での敬語使用の特徴にどのような影響を与えるかを検討する。

調査次ごとの話者全体に占める各職業の話者の割合を図1に示す。第1次はP(proper or professional)とC(control or college)を合計した。凡例は小分類のみを表示してある。大分類は、上から順に、白塗りが事務系、黒塗りが接客系、網掛けが労務系である。大分類ごとの内訳を見ると、事務系は「専門的・技術的職業」と「事務」が中心であり、「管理的職業」も含まれるが割合は低い。接客系には「販売」と「サービス職業」が含まれ、「販売」のほうが多い。労務系

には四つの小分類項目が含まれるが、「生産工程・労務」が最も多くの割合を占め、他の3項目は少ない。

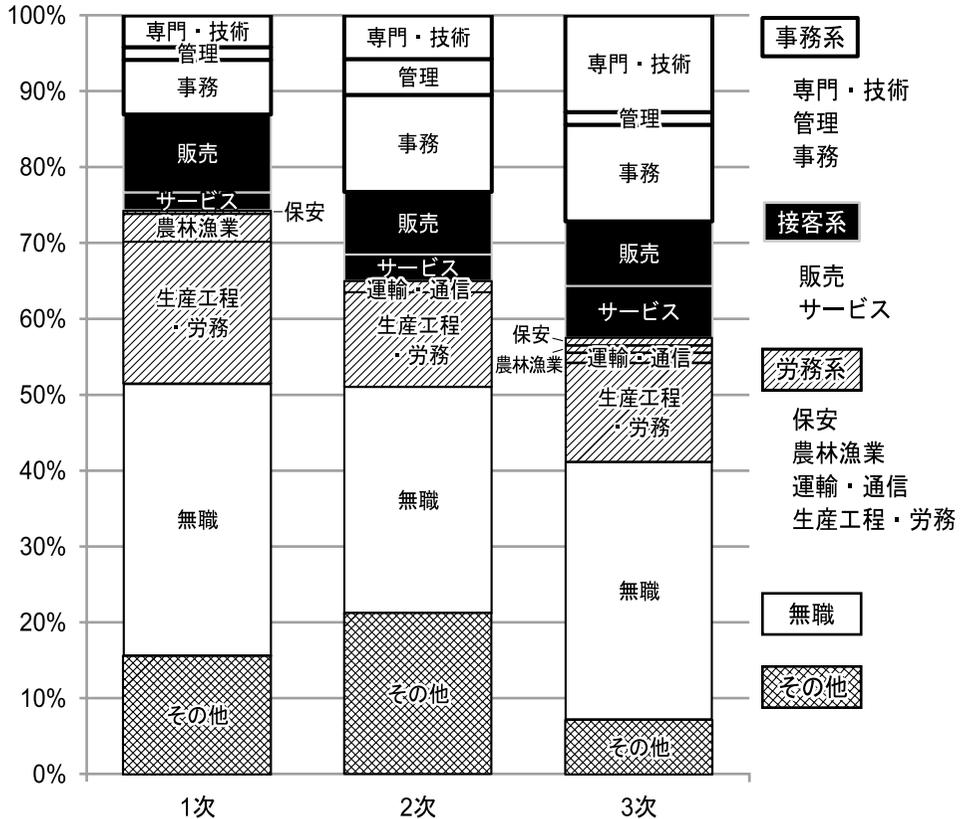


図1 調査次ごとの職業構成比

### 3. 結果

事務系、接客系、労務系の3分類に無職を加えた四つの職業グループについて、11場面ごとに、反応文の丁寧さと長さの平均値を求めた。まず3.1では、調査次ごとの集計結果をもとに、職業による敬語使用特徴の差異を概観する。3.2では話者の生年・年齢ごとの集計結果を示し、敬語使用特徴の経年変化パターンを職業ごとに観察する。なお上述の通り、以下では事務系、接客系、労務系の主要3分類を中心に扱う。無職は参考として提示するにとどめ、その他(分類不能、複数回答、無回答)は本稿では取り上げない。

#### 3.1 敬語使用の職業差

まず調査次ごとの集計結果を見る。丁寧さを図2に、文の長さを図3に示す。調査次およびPとCを区別し、11場面全体を平均した。図2では、丁寧なものほど図の上側に位置するように、縦軸の向きを逆にしてあることに注意してほしい(以下、丁寧さを縦軸にとるグラフはすべて同

様)。図の上側の小さな値はより丁寧であり、下側の大きな値はよりぞんざいである。横軸は調査次を表し、調査次間の間隔は実際の調査年の間隔を反映している。第1次と第2次の間隔は19年、第2次と第3次は36年である。白抜きのマーカーは第1次調査のC（比較グループ）の値であり、見やすさのために左に3年分ずらして配置した。

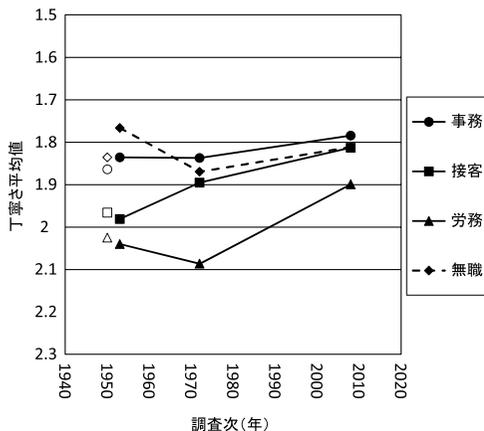


図2 丁寧さの平均値 職業×調査次

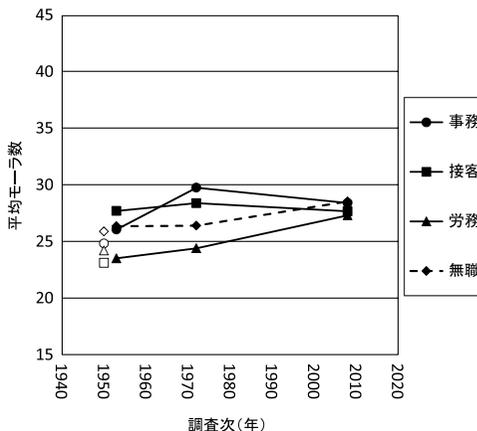


図3 文の長さの平均値 職業×調査次

事務系、接客系、労務系の3分類を比較すると、他と明確に区別できそうなのは労務系である。丁寧さ、文の長さのいずれについても他の職業より低い値を示す。職務の中での敬語使用が比較的少ないと考えられる労務系は、それが多い事務系・接客系に比べて、短くぞんざいに答えるといえそうである。事務系と接客系を比べると、丁寧さについては、3回の調査のいずれにおいても事務系のほうが高い。文の長さはほぼ同程度と読み取れる。

図2の丁寧さの読み取りは、「丁寧さ2」の線を基準にすると分かりやすい。上述の通り丁寧さ2は概ねデスマス体に相当する。事務系と接客系の丁寧さ平均値はいずれの調査次においても2より上にプロットされ、デゴザイマス体とデスマス体が多いことが分かる。これに対し労務系は、第1次と第2次では丁寧さの平均値が2より下にプロットされ、他の二つの職業に比べるとダ体が多く含まれる、つまり敬語を使わない発話が多いことが分かる。

以上について、丁寧さと文の長さのそれぞれを従属変数とし、調査次と職業を独立変数とした2要因分散分析を行った。調査次は1次P、2次、3次の3水準とし、1次Cは除いた。職業は事務系、接客系、労務系の3水準とし、無職は除いた。その結果、丁寧さと文の長さのいずれに対しても、職業の主効果が有意であった（丁寧さ： $F(2, 5383) = 63.5, p < 0.001$ ；文の長さ： $F(2, 5384) = 18.0, p < 0.001$ ）。また、ボンフェローニ法による多重比較では、丁寧さについては、職業3水準のどの組合せにおいても有意差があった（いずれも  $p < 0.001$ ）。文の長さについては、事務系と接客系の組合せを除いて有意差があった（事務系 vs. 接客系： $p = 0.87$ ；それ以外： $p < 0.001$ ）。

以上より、話者の職務内容によって敬語使用の特徴に違いが認められるといえる。まず労務系

の発話は比較的短くぞんざいである。労務系に比べると事務系と接客系は比較的長く丁寧に話す。事務系と接客系を比べると文の長さは同程度だが、丁寧さは事務系のほうが高い。反応文の丁寧さと長さの両方を踏まえて総合的に判断すると、労務系、接客系、事務系の順に敬語使用が増えるといえる。ただしこの事務系と接客系間の丁寧さの差異は、話者の生年・年齢を考慮すると、重要な意味を持たないとみなせる可能性がある。これについては3.2.2で話者の生年別パターンを観察する際に述べる。

図2と図3からはもう一つ重要なことが読み取れる。すなわち職業差の変化である。丁寧さ、文の長さのいずれについても、職業による差は第1次および第2次調査で大きく、第3次調査にかけて縮小する傾向にある。職業ごとに見れば、概ねすべての職業で3回の調査を通して丁寧さは高く、文長は長くなる傾向を見せる。ただし、丁寧さについては接客系と労務系で大幅に増加し、事務系の増加幅は小さい。文の長さについては労務系での増加が目立ち、その結果第3次調査ではどの職業もほぼ同程度である。

上述の分散分析における交互作用を見ると、丁寧さと文の長さのいずれについても、職業と調査次の2要因間の交互作用が有意であった（丁寧さ： $F(4, 5383) = 4.7, p < 0.01$ ；文の長さ： $F(4, 5384) = 4.2, p < 0.01$ ）。丁寧さ、文の長さに対する職業の効果が有意であることをすでに見たが、この効果は調査次によって異なる、つまり職業差が調査次によって異なるといえる。続いて各調査次における職業の単純効果を見たところ、まず丁寧さについては、すべての調査次において職業の単純効果が有意であった（第1次P： $F(2, 5383) = 19.8$ ；第2次： $F(2, 5383) = 46.1$ ；第3次： $F(2, 5383) = 8.7$ ；いずれも  $p < 0.001$ ）。図2では職業差が縮まっているように見えるが、第3次調査でも依然として有意差がある。次に文の長さについては、第3次調査を除いて職業の単純効果が有意であった（第1次P： $F(2, 5384) = 7.1, p < 0.001$ ；第2次： $F(2, 5384) = 20.6, p < 0.001$ ；第3次： $F(2, 5384) = 0.9, p = 0.44$ ）。第1次、2次での職業差が、第3次では小さくなったといえそうである。

こうした職業差の縮小というパターンは、最近の運送業の人や職人さん（いずれも労務系に分類される）の客へのことばが、マニュアル敬語的ではあるが、丁寧になった傾向と合致する。職業と言語使用の結びつきが弱まってきていると読める。職業の違いを上下関係や身分・階級などの社会的立場の違いと捉えるならば、敬語の「民主化・平等化」の一例と見ることができる（井上1999）。

### 3.2 職業ごとの敬語使用特徴の経年変化

3.1では職業による敬語使用の特徴の差異を調査次ごとに見た。ここではさらに各調査次内で話者の生年・年齢を区別し、見かけ時間および実時間の比較による個人内での経年変化パターンを職業ごとに見る。話者の生年を10年ごとに区切って反応文の丁寧さと長さの平均値を求めた。

#### 3.2.1 職業別、各年代の話者数

はじめに表5で各生年区分の話者数を見ておこう。表中の生年は各区分の真ん中の年を示す

〔1888年〕は1883年～1892年生まれの話者群)。該当する話者のいないセルを網掛けにした。セルごとの話者数は全体に少ないので、以下のグラフの読み取りには注意が必要である。第1次調査のサンプルには調査実施の段階から70代話者は含まれていない。

表5 10年刻みの各生年・年齢区分の話者数

		生年・年齢						
		1888	1898	1908	1918	1928	1935.5	
		60代	50代	40代	30代	20代	10代	
第1次調査	P	事務系		4	5	9	16	6
		接客系	1	4	6	5	11	3
		労務系	6	6	8	7	16	7
		無職	5	14	15	18	15	23
	C	事務系		2	3	1	10	
		接客系	1	3	4	7	6	3
		労務系	2	9	8	8	16	5
		無職	9	5	9	11	17	13
第2次調査		1897	1907	1917	1927	1937	1947	1954.5
		70代	60代	50代	40代	30代	20代	10代
	事務系		4	9	17	22	36	5
	接客系	2	3	5	11	11	11	4
	労務系	2	4	5	13	12	16	4
	無職	9	15	9	17	18	29	22
第3次調査		1934	1944	1954	1964	1974	1984	1991.5
		70代	60代	50代	40代	30代	20代	10代
	事務系	1	11	15	23	19	14	
	接客系	3	13	12	7	9	3	
	労務系	4	6	12	8	11	8	1
	無職	28	23	7	10	13	9	14

### 3.2.2 発話の丁寧さの経年変化パターン

集計結果を見る。まず図4～図7に、丁寧さについて各年代の平均値を職業ごとに示す。これらの図では点線が第1次、破線が第2次、実線が第3次の調査結果であり、白抜きマーカーの細線は第1次Cである。横軸は生年を表し、10年刻みでプロットした。各プロットの年代を分かりやすくするために、30代のマーカーを少し大きくした。これを基準にして、話者のいない（プロットされていない）年代があることに注意してほしい。

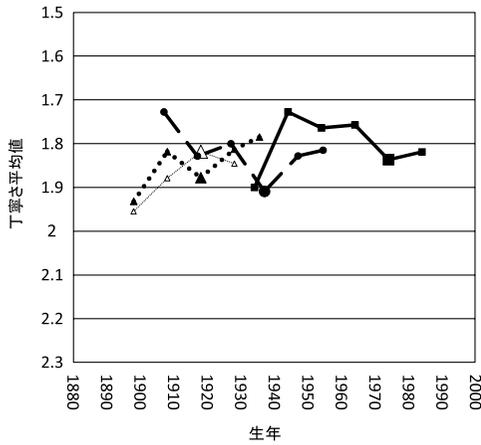


図4 丁寧さ平均値  
事務系 調査次×生年

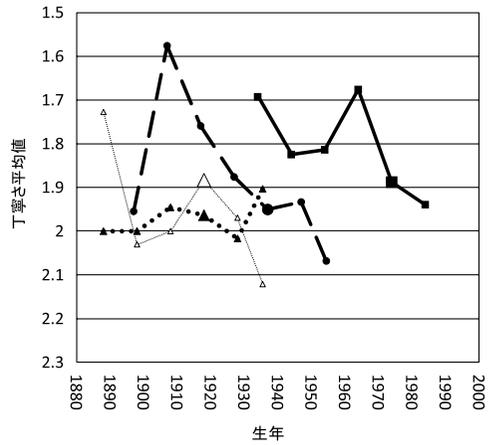


図5 丁寧さ平均値  
接客系 調査次×生年

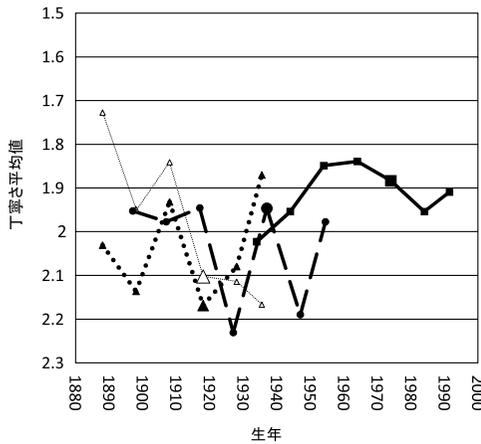


図6 丁寧さ平均値  
労務系 調査次×生年

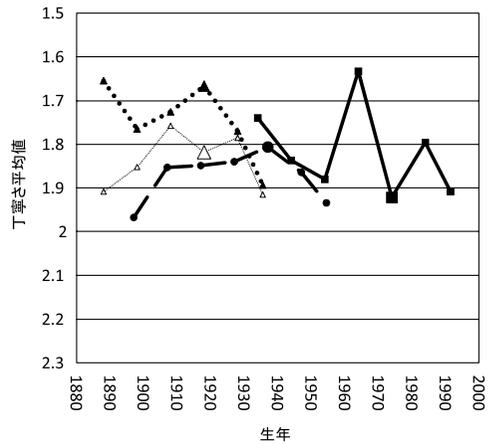


図7 丁寧さ平均値  
無職 調査次×生年

まず、比較的読み取りやすく、かつ重要なパターンを示す図5の接客系から見ていこう。図5の右端に実線で示した第3次調査の曲線を見ると、左側の生年が早い話者ほど丁寧さが高いという傾向が窺える。言い換えると、調査時点での年齢が高い話者ほど丁寧さが高いという傾向である。40代の話者の丁寧さが最も高く例外的ではあるものの（10代が含まれないため最右端の点が20代であることに注意）、これを除くと第3次調査の全体としては概ね右下がりのパターンを示す。そして、第1次C（白抜きマーカーの細線）と第2次（破線）についてもこれとほぼ同様のことがいえる。すなわち、第2次の70代（話者数2名のみ）などの例外的な部分があるため単調なパターンではないものの、接客系の丁寧さの曲線は概ね右下がりであり、高年層ほど丁寧であるというパターンを示す。接客系の中で唯一明確に異なるパターンを示すのは第1次Pの話者群である。すなわち第1次Pは年齢によらずほぼ横ばい、あるいは、20代が最も低いとい

う点を除けば年齢が低いほどやや丁寧になる。

このように、例外的な部分は多く認められるものの、接客系の職業の話者は年齢が高いほど発話の丁寧さが高いといえそうである。こうした話者の年齢による丁寧さの差異を見かけ時間上の変化として捉えると、接客系の話者は年齢が高くなるほどより丁寧に話すようになるという、個人内での経年変化パターンを示すといえる。

以上は見かけ時間の分析だが、実時間の分析でも同じことが読み取れる。図5から、特定の年代生まれの話者は、後の調査になり年齢が高くなるほど丁寧さが高くなるといえる。具体的に見てみよう。例えば1930年代生まれの話者は、第1次調査には10代、第2次調査には30代、第3次調査には70代の話者として参加している。図5の1930～1940年の辺りを縦に見ていくと、この年代生まれの話者は、第1次(10代)から第2次(30代)にかけて丁寧さがやや低くなるもののほぼ同程度であり、そこから第3次(70代)にかけて丁寧さが増加する。つまり加齢に伴いより丁寧に話すようになる。このことは接客系話者の図5で比較可能な他の年代についてもほぼ同様にいえる。すなわち、接客系職業の話者は、実時間で見て、年齢が高くなるほど丁寧に話すようになるといえる。

こうした加齢に伴う丁寧さの変化は、敬語の習得という観点から見ると、敬語の「成人後採用」の例であるといえる(Boberg 2004, 井上 2011, Inoue & Yamashita 2014)。すなわち個人内での言語形成期以降の言語変化・習得である。このパターンは、特に岡崎敬語調査資料の分析において、敬語に関わる様々な形式・現象について観察された(井上他 2016)。例えば「いただく」使用数、「あの一」使用数、そして本稿で扱っている発話の丁寧さ・長さなどである。発話の丁寧さは、岡崎敬語調査のランダムサンプル全体で見ても、また、性別や学歴などの話者属性の水準ごとに見ても成人後採用が観察されたが、本稿での職業別分析によって、接客系職業の話者にもこれが確認されたことになる。

しかし、他の職業では、丁寧さの成人後採用のパターンは観察されないといえそうである。接客系のパターンを他の職業と比較しよう。図4の事務系を見ると、まず全体としては概ね平坦であり、年齢による丁寧さの差異が比較的少ないといえそうである。特に第1次はPCいずれもやや右上がり、すなわち年齢が低いほど丁寧さが高いというパターンを示す。第2次と3次については、第3次の70代(話者数1名のみ)を除くとやや右下がりの傾向を示すが、その幅は図5の接客系に比べると明らかに小さい。一方図6の労務系を見ると、接客系と同様に年齢差は大きい。第1次Cでは高年層ほど丁寧だといえるが、第1次Pおよび第2次ではそうした傾向は読み取れない。第3次は高年層と若年層の丁寧さが低いというパターンを示す。全体として一貫した傾向は見られず、特に、接客系のように右下がりのパターンとはいえない。

このように、事務系と労務系では、発話の丁寧さに関する成人後採用のパターンは観察されないといえそうである。あるいは、少なくとも、成人後採用をより明瞭に示すのは接客系であるといえる。話者の職業によって、敬語の習得パターン、あるいは敬語使用の特徴の加齢変化のパターンが異なることを示す結果といえる。

次に丁寧さの経年変化パターンの職業差をもう少し詳しく見てみよう。比較がやや難しいが、

例えば事務系（図4）と接客系（図5）のそれぞれの第3次調査の値（実線）を比べよう。年齢が低いうち（20代、30代）は接客系の丁寧さのほうが高いが、年齢が高くなると（40代、70代）接客系のほうが高くなるといえる。第2次調査（破線）についてもほぼ同様で、10代～40代は事務系のほうが丁寧だが、50代～60代では逆転し、接客系のほうが高くなる（接客系の70代は例外的に低く、かつ事務系の70代は話者無し）。ただし第1次調査（点線）では、比較可能な中ではどの年代でも事務系のほうが丁寧である。同様に労務系と他の二つの職業をそれぞれ比較すると、労務系は年代によるばらつきが大きいので単純比較は難しいが、概ね、比較的多くの年代において労務系の丁寧さは他の職業に比べて低いといえそうである。

以上より、職業ごとの丁寧さの変化パターンについて以下のようにいえる。事務系は若いうちから丁寧に話すものの、加齢による丁寧さの変化（増加）は少ない。接客系は若いうちは事務系に比べてややぞんざいに話すか、加齢とともにより丁寧に話すようになり、高年齢層では事務系よりも丁寧になる場合もある。労務系の丁寧さは全体的に低く、加齢による一方向への変化（増加または減少）は見られず、世代によるばらつきが大きい。なお上の事務系と接客系の年代別パターンの比較では、両者の全体的な（全年代を合計した）丁寧さの差異に関する判断は難しいといえる。3.1で見た通り全体の丁寧さは接客系よりも事務系のほうがやや高い。しかしこれは、少なくとも第2次と第3次においては、事務系のほうがどの年代でも接客系より丁寧であるためではなく、年代によってどちらがより丁寧であるかが異なるためである。したがって、年代を区別しない場合、事務系と接客系のどちらがより丁寧かは一概にはいえない。

### 3.2.3 発話の長さの経年変化パターン

次に文の長さについても同様に、生年・年齢による差異を職業ごとに見てみよう。職業別に、10年刻みの生年ごとの文の長さの平均値を図8～図11に示す。

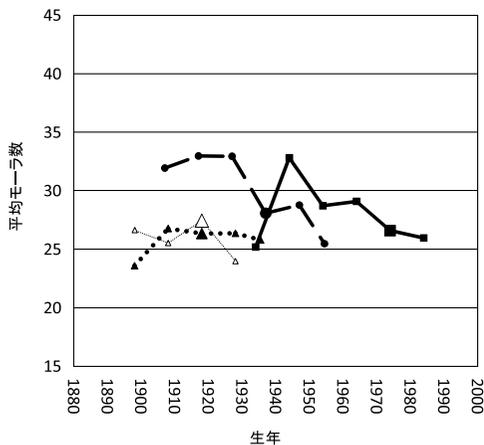


図8 文の長さ平均値  
事務系 調査次×生年

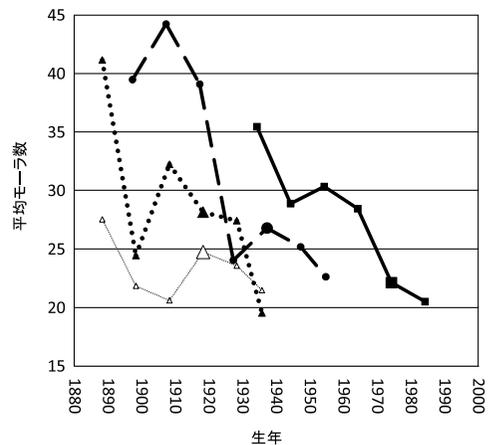


図9 文の長さ平均値  
接客系 調査次×生年

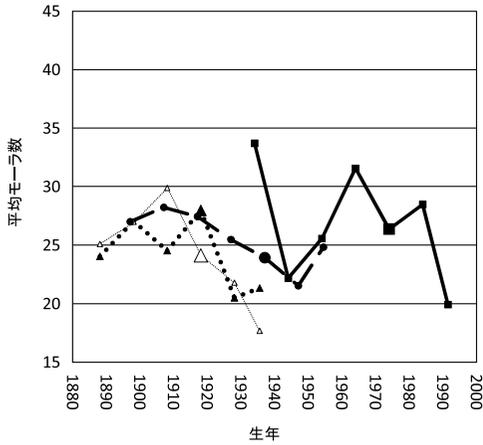


図10 文の長さ平均値  
労務系 調査次×生年

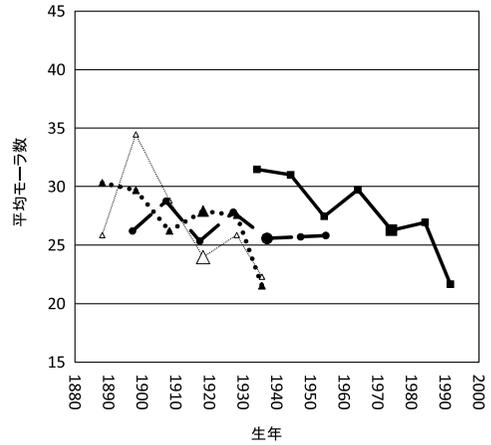


図11 文の長さ平均値  
無職 調査次×生年

文の長さについても、結論としては、丁寧さの場合とほぼ同じことがいえそうである。すなわち、年齢が高くなるほど文が長くなるという成人後採用のパターンが全体に観察されるが、これが最も明瞭に、顕著に観察できるのは接客系であるといえる。以下、詳細に見ていこう。

まず接客系の図9から見ると、すべての調査次の曲線が概ね右下がりである。第1次Pの50代や第2次の70代などの例外的な点も認められるが、全体としては、年齢が高いほど文が長いといえそうである。見かけ時間での成人後採用のパターンである。実時間で見ると、1930年辺りで生まれた話者（第1次20代、第2次40代）を除いたすべての年代において、後の調査になり年齢が高くなるほど反応文の長さは長くなる。見かけ時間上の比較で例外的な振る舞いを見た第1次Pの50代と第2次の70代（1900年付近生まれの話者）も、実時間の比較では加齢に伴い文が長くなる。やはり、成人後採用のパターンを示すことが確認できる。接客系の話者は、見かけ時間においても実時間においても、年齢が高くなるほど反応文が長くなるといえる。

次に図8より、事務系の話者も、文の長さについては成人後採用のパターンを示すといえそうである。第1次調査はPCともにほぼ横ばいだが、2次と3次は概ね右下がりである。第3次の70代が唯一の明らかな例外だが、これは1名の話者のみの数値である（表5参照）。実時間で見ても、この第3次70代を含む1930年代生まれの話者を除くと、すべての年代において後の調査になるほど文が長くなる。

このように、事務系も接客系と同様に、パターンとしては成人後採用を示す。しかし両者の大きな違いは、文の長さの増加幅・変動幅である。各調査次の曲線の変動幅（見かけ時間）で見ても、同一生年の調査次間での増加幅（実時間）で見ても、文の長さの年齢差、すなわち加齢による文の長さの変化幅は、事務系と接客系では接客系のほうが明らかに大きい。図8と図9から読み取れる平均値の範囲でいうと、事務系はおよそ25～35モーラ、接客系は20～45モーラである。以上をまとめると、丁寧さの場合とほぼ同じことがいえる。すなわち、事務系は若いうちから比較的長く話し、加齢とともにより長く話すようになるがその変化幅は小さい。一方、接客系

は若いうちは短く話すのが、加齢に伴い長く話すようになる。3.1では事務系と接客系の文の長さが全体としてはほぼ同程度であることを見たが（図3）、図8と図9を世代別に比較して見ると、若年層では事務系のほうが、高年層では接客系のほうがより長く話すようである。

図10の労務系は読み取りがやや難しいが、典型的な成人後採用のパターンを示してはいないといえそうである。調査次ごとに見かけ時間で見ると、どの曲線も右下がりのパターンと見ることはできるが、世代によるばらつきが大きく、一貫したパターンを示していないとも読める。調査次間で実時間の比較をすると、文が長くなる年代もあるが（1910年付近、1930年代）、前の調査とほぼ変わらない年代も多い（1900年および1920年付近、1940～1950年代）。そして、文の長さの増加が観察される場合でも、その幅は接客系に比べると小さい。

以上より、文の長さの加齢変化パターンは話者の職業によって異なるといえる。すなわち、話者の加齢による文の長さの増加幅は、接客系の話者で最も大きい。丁寧さの場合とほぼ同様に、文の長さについても、成人後採用のパターンを最も顕著に示すのは接客系職業といえる。こうした丁寧さ・文の長さの増加に関わる要因として、「ていただく」の使用の増加が挙げられる。「ていただく」の使用数は3回の岡崎敬語調査を通して増加し、また高年層ほど使用数が多いという典型的な成人後採用のパターンを示す（井上他2012）。「ていただく」使用数の増加は、発話の丁寧さ・長さに影響する（井上他2016）。すなわち、丁寧さの段階付けの基準（表2）より、「てもらう」などの関連形式より高い点数が与えられるため、「ていただく」が増加すると丁寧さも高くなる。また、「ていただく」を使えば当然その分だけ発話が長くなる。つまり、加齢による発話の丁寧さ・長さの増加幅が接客系職業の話者において最も大きいというここでの観察結果は、接客系話者が「ていただく」の使用を増やしたことによるものである可能性が考えられる。

#### 4. 議論

以上、敬語使用の差異を表す指標として発話の丁寧さと長さを集計し、これらが話者の職業によって異なることを見てきた。では、こうした観察結果から、職業と敬語使用の関係についてどのような知見が得られるであろうか？ 以下では、主に職務の中での敬語使用の違いに注目し、観察された職業差の説明を試みる。そして、その過程で明らかとなる敬語と職業の関係に関する重要な知見について議論する。

##### 4.1 職務内容と敬語使用の関係

3.1で示した敬語使用の職業差は、以下のように要約できる。事務系、接客系、労務系のうち、労務系が最も短くぞんざいに話す。言い換えると労務系は最も敬語使用が少ない。事務系と接客系を比べると、発話の長さは同程度だが、丁寧さで見ると事務系のほうがやや丁寧である。ただし3.2.2で述べた通り、世代別に見ると、すべての年代で一貫した差が事務系と接客系の間にあるわけではない。総合的に判断すると、敬語使用は事務系と接客系が同程度で比較的多く、労務系で比較的少ないといえるだろう。では、こうした職業差はどのようにして生じるのであろうか？

敬語使用の職業差に関わる要因としてまず考えられるのが、職業と結び付けられる社会的地位

である。あるいは、収入の違い等による社会的な評価・イメージといってもよい。これに関する客観的な判断は難しいものの、一般的にいつて社会的な地位・評価が高いといえる職業は本稿での3分類では事務系に多く含まれる（例えば医者、教師、会社経営者・管理職など）。こうした職業は労務系で最も少ない。このため本研究の分析結果は、こうした社会的地位の違いによって、敬語使用の特徴が異なることを示すものと解釈できる。すなわち、社会的地位の高い職業に従事する者ほど敬語使用が多く、より丁寧に話すという解釈である。しかしこの解釈には問題がある。まずここでいう社会的地位や評価というのは客観的判定が難しく、本稿での職業3分類がこの違いを反映しているとは限らない。そもそも本稿での職業分類は、社会的地位による分類を意図したのではない。このため本稿で示した職業差が、社会的地位の違いに起因するものと解釈するのは困難である。

より妥当と思われる解釈は次のようなものである。すなわち、本稿で得られた敬語使用特徴の職業差は、職務の中での敬語使用の違いによるものであるとする解釈である。2.4で述べた通り、本稿での職業分類は主に職務の中での敬語使用の違いに基づく。すなわち、ことばによるコミュニケーション、特に敬語の使用量から見ると、接客系が最も多く、事務系が次に多く、労務系は最も少ないと推測される。こうした職務の中での敬語の使用量の違いが、職務以外の私的な場面での敬語使用にも影響を与えると考えると、妥当な説明が可能である。すなわち、職務において敬語を多く使用する話者は、仕事以外の場面でも敬語を多く使用し、このため、本研究での11調査場面でも職業による差が現れたと考えることができる。職務において敬語を比較的多く使用する事務系・接客系は、そうでない労務系に比べて、私的場面での敬語使用も多い。このように考えると、事務系・接客系の話者が、労務系に比べて、長く丁寧に話すという本研究の分析結果に妥当な説明を与えることが可能である。

#### 4.2 職業と敬語の習得・変化

3.2では、敬語使用特徴の経年変化パターン、すなわち加齢による発話の丁寧さ・長さの変化パターンが職業によって異なることを示した。具体的には、接客系の話者では年齢が高くなるほど長く丁寧に話すようになるという成人後採用のパターンが観察されたのに対し、事務系・労務系ではこれが明瞭に観察されなかった。別の言い方をすると、加齢による敬語使用量の増加の幅は、接客系で最も大きかった。事務系と労務系では、加齢による敬語使用量の増加が見られたとしてもその幅は小さく、さらには年齢によらずほぼ一定の場合や減少する場合も見られた。

以上の観察結果からいえるのは、第一に、敬語の習得パターンが話者の職業に影響を受けるということである。接客系職業の話者は、敬語使用特徴の加齢変化に関して、事務系および労務系とは明確に異なるパターンを示す。これは職業によって敬語の習得パターンが異なること、つまり敬語の習得・変化過程に話者の職業が影響することを示すものと解釈できる。

そしてその影響がどのようなものかという点、これは4.1の議論と同様に、職務内容の違いによって説明できると考えられる。すなわち、職務の中での敬語使用量が多い者は、私的場面での敬語使用が多いだけでなく、加齢に伴う敬語使用量の増加幅も大きいと考えられる。ここでいう

加齢に伴う敬語使用量の増加とは、その習熟度合いの増加や、運用能力の向上・上達などといってもよい。つまり、職務の中で敬語をよく使うものほど、その運用能力が伸びる、敬語が上達するという解釈である。実際、敬語使用量の最も顕著な増加が認められた接客系は、顧客との会話が職務の中心となるため、職務の中での敬語使用量が最も多いと考えられる職業である。接客系の話者は、他の職業と比べて職場での敬語使用が多いために、その生涯を通して敬語使用の能力を向上させると解釈できる。

ただし、接客系と同様に職務中の敬語使用が比較的多いと考えられる事務系では、成人後採用は観察されないか、観察されたとしてもその変化幅は接客系よりも小さいことに注意する必要がある。そしてこのことは、単に職務の中での敬語使用量の違いでは説明できそうにない。というのも、3.2.2 で見たように、事務系の発話の丁寧さは年齢の低いうちからすでに接客系より高いからである。これと同様のことは発話の長さについてもいえる。つまり、接客系は職務の中で、その生涯を通じて長く丁寧に話すようになるのに対し、事務系はいわばはじめから長く丁寧に話す。この違いがどのような要因によるものかは現時点では特定できない。事務系のほうが早い時期に敬語を習得することを示しているといえるが、そうだとするとその後の丁寧さ・長さの増加幅が接客系より小さいことや、高年層では接客系のほうが長く丁寧になることの説明ができない。だがいずれにせよ、この例もやはり、職業によって敬語の習得・変化過程が異なることを示すものといえる。

## 5. 結論

話者の職業・職務内容によって職場での敬語使用とその意識が異なることは、「企業の中の敬語」の調査結果から分かっていた（国立国語研究所 1982）。本稿で新たに分かったのは、話者の職業によって、職場だけでなく、職場以外の私的な場面でも敬語使用の特徴が異なるということである。岡崎敬語調査の設定場面は、会話の相手として知り合いだけでなく初対面の人や店員なども含むものの、少なくとも（被調査者にとって）職務の場面ではない。このため、回答には私的な、普段のことが用いられたと考えることができる。こうした私的な場面での発話にも職業差が見られた。職業の違い、そしてこれに伴う職務の中での敬語使用の違いが、私的場面での敬語使用にも影響を及ぼすといえる。

本稿ではこれに加えて、話者の職業によって、敬語使用特徴の加齢による変化パターンが異なるということも明らかにした。別の言い方をすると、敬語の習得時期や、生涯を通しての敬語運用能力の向上、習熟の度合いの増加などのパターンが、話者の職業によって異なるともいえる。ただし、こうしたパターンの差異に関わる要因の特定には至らなかった。接客系の話者は職務の中で顧客との会話を通して敬語運用能力を高めると解釈したが、事務系が異なるパターンを示すのはなぜかといった問題が残る。

話者の社会属性項目の一つである職業は、職務の中での敬語使用を特徴付けるのみならず、私的場面での敬語使用にも影響することが分かった。しかもその影響は敬語の習得・変化という動的側面にも及ぶ。職業という話者属性が、職場での敬語を考える場合だけでなく、家庭や地域社

会などの、職場以外の私的な場面での敬語を考える際にも重要な要因の一つであることが明らかになった。

### 参考文献

- Boberg, Charles (2004) Real and apparent time in language change: Late adoption of changes in Montreal English. *American Speech* 79(3): 250-269.
- 井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子 (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動』 東京：南雲堂.
- 井上史雄 (1999) 『敬語はこわくない』 東京：講談社.
- 井上史雄 (2011) 『経済言語学論考—言語・方言・敬語の値打ち—』 東京：明治書院.
- 井上史雄・阿部貴人・鎌水兼貴・柳村裕・丁美貞 (2016) 『敬語表現の成人後採用—岡崎における半世紀の変化—』 国立国語研究所「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」報告書.
- 井上史雄・松田謙次郎・金順任 (2012) 「岡崎 100 年間の「ていただく」増加傾向—受惠表現にみる敬語の民主化—」『国立国語研究所論集』 4: 1-25.
- Inoue, Fumio & Akemi Yamashita (2014) Change in the use of beautifying “o-” and late adoption—A historical interpretation of data one decade apart. *Proceedings of METHODS 14 London Aug 2011*.
- 国立国語研究所 (1957) 『敬語と敬語意識』 (国立国語研究所報告 11) 東京：秀英出版.
- 国立国語研究所 (1982) 『企業の中の敬語』 (国立国語研究所報告 73) 東京：三省堂.
- 国立国語研究所 (1983) 『敬語と敬語意識—岡崎における 20 年前との比較』 (国立国語研究所報告 77) 東京：三省堂.
- 国立国語研究所 (2010) 『敬語と敬語意識—愛知県岡崎市における第三次調査—』 科学研究費補助金研究成果報告書 第 1～4 分冊.
- Matsuda, Kenjiro (2012) What happened to the honorifics in a local Japanese dialect in 55 years: A report from the Okazaki Survey on Honorifics. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 18(2): 49-57.
- 柳村裕 (2014) 「ことばの丁寧さの経年変化と社会的要因—岡崎敬語調査から—」『国立国語研究所論集』 8: 177-196.

## Variations and Changes in the Usage of Honorifics due to Occupations: Analyses from the Okazaki Survey on Honorifics

YANAGIMURA Yu

Research Fellow, Tokyo University of Foreign Studies /  
Adjunct Researcher, Department of Language Change and Variation, NINJAL [–2016.03]

### Abstract

This paper investigates the relationship between the usage of honorifics and occupations based on analyses of materials in the Okazaki Survey on Honorifics. The politeness level and utterance length are measured as indices of the usage of honorifics. Three types of occupations, “office work,” “service trade,” and “labor,” are compared concerning utterance politeness and length.

The results are as follows. Of the three types of occupations, speakers in the labor group were found to be the lowest in the politeness level and the shortest in their utterance length. The office work group and service trade group scored almost similarly in the utterance length. On temporal change, those in the service trade group showed late adoption; in other words, their utterances become more polite and longer as they grew older. The office work and labor groups did not show this late adoption pattern.

These results are interpreted as follows. First, the differences in the usage of honorifics among the three groups are due to the job specifications in each occupation. In other words, the usage of honorifics at work is considered to affect the usage of honorifics in other non-work-related situations. Second, the characteristic usage of honorifics at work in each occupation also affects the way the honorifics are adopted and changed. Based on these analyses, the understanding of sociolinguistic variations in the usage, adoption, and change of honorifics based on occupation was clearly important.

**Key words:** honorifics, occupation, politeness level, length of utterance, late adoption